

3月11日の後で

『津波てんでんこ』 近代日本の津波史

山下文男著

評・三浦 佑之

(古代文学研究者)
立正大教授

未曾有とか想定外とかいう言葉を目や耳にするたびに、責任回避の魂胆が透けてうさん臭い感じがする。

日本列島に生きている限り、地震と津波が避けがたいのは誰もが知っている。そんな海岸線のあちこちに原子力発電所を作っておいて想定外とは、何をか言わ

新日本出版社 1600円



津波(60年)、日本海中部地震津波(83年)、北海道南西沖地震津波(93年)を取りあげ、その惨状を紹介し、対策や教訓を伝えようとする。

思い出したくもないとい

恐ろしさ伝え続ける必要

んや。実際、三陸海岸に住む人々は、いつ来襲するかわからない津波に備え、避難訓練をくり返していた。それがなければ被害は何倍にもなったはずで、未曾有でも想定外でもなかった。

本書は、百年ほどの間に列島を襲った、明治三陸大津波(1896年)、関東大地震津波(1923年)、昭和三陸津波(33年)、東南海地震津波(44年)、南海地震津波(46年)、チリ

う方が多い今、あえて本書を選んだ。被害を最小限に抑えるには、くり返し確認し正しく伝え続けるしかないという著者の主張に共鳴したからである。三陸海岸に生まれ育ち、一族の多くを津波で亡くした経験をもつ著者の言葉は重く、現実的だ。とにかく、一刻も早く『てんでんこ』に逃げろ。「人のことなどかまわずに、てんでんばらばらに」とは、非人情にも聞こえる

が、それほど津波は恐ろしいものだということが。もちろん、人を押し退けて我先にというのではない。たえず避難訓練をしていけば、すばやい集団行動はとれるし、災害弱者も救える。

必要なのは、津波の恐ろしさを伝え続けること。そして、いざ襲われたら一目散に逃げる、てんでんこに。

また著者は言う。国が責任をもった、義務教育のなかでの災害教育を太い柱として、地方自治体や

各種社会組織による具体的な防災教育をくり返し、あらゆる

自然災害に耐える国造りを目指すべきだ、と。

被害を最小限に抑えるには、風化を拒み、伝え続けること。わかっていながら簡単なことではない。だから、組織的な教育や絶えざる訓練が必要なのである。

◇やました・ふみお 1924年岩手県大船渡市生まれ。津波史研究家。昭和三陸津波に遭う。今回は、入院中の同県陸前高田市の病院で津波に襲われたが生還した。